

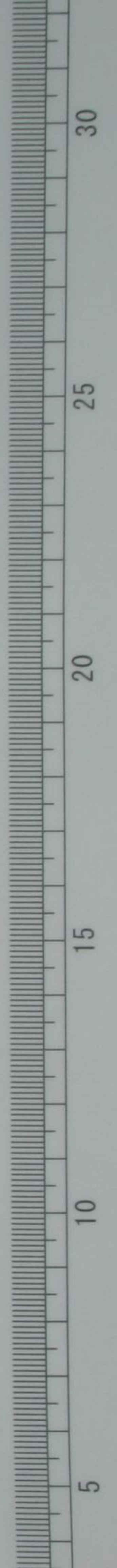


女性時代社

言霊の幸はふ國に生れて  
 言霊の幸をまけ得たる  
 大いなる樹は  
 溢然と  
 敷もなく、形もなく、  
 空高く輝けど  
 星は情の如く  
 げゆふど

大いなる樹は  
 音もなく、形もなく、  
 響もきこなく  
 木の中のこぼるる音は  
 落葉の降る音は  
 木の中のこぼるる音は  
 音もなく、響もきこなく  
 響もきこなく

80  
 北原白牡丹の雲は捧ぐ  
 哀  
 詩





大いなる御霊は

昇登の日に浄められ

純白に還り

林の日に、謚かに

御霊よ、永劫に鎮りたまへ。



(リ日防下頁) 弛(二)

九本、二十三行、二十七

九本

昭和十七年十一月二日 於七時五十分 北京  
日秋の病草り、瀟灑として逝く。詩魂永へに  
神去りて、再び温客に接する日は日のので  
ある。

憶へば君が五十八年の生活、古今稀なる一  
大詩人の生をとり終焉の日まで、豪華をる一

巻の絵巻物の如く、<sup>物</sup>眼に映り、今、その巻  
を細めると、<sup>心</sup>散りて在天の靈に礼拝す。

私が初めて君の名を知り、君の作品を見た  
のは明治三十六年の冬、日文庫の詩欄に柳  
里柳河から、<sup>の詩</sup>一篇を寄せられた時か

らである。翌七年の春「春湯輕詩」林下の題  
想、等々を見るに及び、さへ尋常一般の才人で  
はないと思つたが、<sup>果</sup>然次々と天経早に力作

が出、全部覺醒賦に至つては非凡なる力  
量を示した。明治三十八九年の頃は詩壇の一

女性時代社



時高樹に達した時期で、天下の秀才雷の如く  
 可成る軍に集りまり、聖者とこの自分も眼  
 もあやむる心地かたのひあるが、その中に於  
 て断絶と光つてゐたのだ。~~聖~~最初のスター  
 白松はトを切つた時から、~~聖~~股に  
 大成すべき萌芽は~~聖~~にあらはれ、~~聖~~の待に於て  
 三十八年に出発すると、君は直ぐ私を~~聖~~  
 へく水た。早稲田の制服を着た~~聖~~の  
 生翠は彷彿と~~聖~~眼に残つてゐる。その時  
 は二人連で来た、一人はたかか長田秀雄君で

あつちやうに覺えてゐる。  
 爾来~~聖~~の四十年に近い親交が續けられたり  
 すが、その間友人としてこそ~~聖~~はなれが、  
 中おしも指導に任じたり~~聖~~でも言ひに、ま  
 は最後まで私を先生呼はり~~聖~~を~~聖~~が  
 然るいふと、~~聖~~の~~聖~~なる人格の一面が  
 現はれる。  
 田~~聖~~は最初の苗を育てたおけの~~聖~~を  
 に過おきいのだが、~~聖~~の~~聖~~で  
 もう一人傳れた人を喪つてゐる。それ

女性時代社



は与野野晶子さんである。晶子さんが未だ生  
家に居て、一つも作品を世に示さなかつた時  
に、~~私~~ <sup>私</sup> ~~は~~ <sup>は</sup> ~~あ~~ <sup>あ</sup> ~~ま~~ <sup>ま</sup> ~~さ~~ <sup>さ</sup> ~~の~~ <sup>の</sup> 詩歌欄を引受けて  
同じ柳里の場に住てゐた関係上、初めて晶子  
さんの詩歌を選擇して発表した。矢張り進歩  
の速かき方で、向もなく <sup>可</sup> 明星 <sup>正</sup> 誌上で活躍  
するやうになり、始終 <sup>往</sup> <sup>来</sup> は <sup>は</sup> <sup>な</sup> <sup>か</sup> <sup>つ</sup> <sup>た</sup> <sup>が</sup> <sup>消</sup>  
息はお互に分つてゐた。

白林君といひ、晶子さんといひ、最初に見  
て見たりは私の幸とする起りだけれど、最後

日し赤之を見ようとは全く豫期 <sup>な</sup> <sup>か</sup> <sup>つ</sup> <sup>た</sup>。  
今両者の生涯を回顧して感 <sup>じ</sup> <sup>ら</sup> <sup>る</sup> <sup>こ</sup> <sup>と</sup> <sup>が</sup> <sup>あ</sup> <sup>ま</sup> <sup>り</sup>  
に多く、茫乎として ~~思~~ <sup>た</sup> <sup>い</sup> <sup>此</sup> <sup>夢</sup> <sup>の</sup> <sup>如</sup> <sup>し</sup> <sup>と</sup> <sup>び</sup>  
もいふ外はない。

孰れにしても藝術道の多難多苦なることが  
相 <sup>あ</sup> <sup>は</sup> <sup>れ</sup> <sup>ら</sup> <sup>る</sup>。白林の如きもよくその苦難の修行  
に堪へて、自己の天命を生かす得たものだ。  
生涯とたゝかひ、世俗とたゝかひ、たゝかひ  
ながらも彼は着々と自己の藝術を築き上げた。  
一時は困苦窮乏の生活に喘 <sup>い</sup> <sup>が</sup> <sup>こ</sup> <sup>と</sup> <sup>も</sup> <sup>あ</sup> <sup>つ</sup> <sup>た</sup>



が、群衆決して生流負けをうかづた。後に  
は寧ろ生流に勝ち過ぎるくらぬにやうな心

と、一時は容易きうぬ忍愛の時代もあらた。

今身柱雄君のやうな篤志を援<sup>る</sup>者と、菊子

夫人のやうな温良なる内助者があつて、<sup>白</sup>秋

君のゆ半生も幸福であつたうと推測される

が、同時に晩年に於て健康を損じ、強ど失明

するに至つたのは寔に痛ま<sup>しい</sup>事<sup>だ</sup>である

けれど、失明はしても心眼<sup>の</sup>いふく明らか

に、病苦を征服して動せぬ<sup>ま</sup>が<sup>ん</sup>作をつづ

(東水記と)

け得たのは、さすがに名匠の本質を<sup>精</sup>彩<sup>を</sup>散

散<sup>の</sup>外はない。

發揮したもので

生前、健康の日に愛蔵が白秋編を書いてや

ようと思つたことはあるのだが、<sup>深</sup>り抱

擁力が大きいので、<sup>何</sup>処から<sup>午</sup>を<sup>着</sup>けてい

のやら迷はされて、遂にその機を逸してしま

つた。白秋の藝術を評価するには既に二千年

に亘るわが邦の伝統的詩歌の精神につかひ

てやるので全く簡単には片附かない。人麿の

やうな情熱もあり、芭蕉のやうな幽寂もあり、

女性時代社



西行のやうな澄心もあり、兼村のやうな  
もあり。隆達のやうな風騷もあり、一茶のや  
うな童心もあり、それらの海術精神が渾然と  
して大成されてゐるのだから、由来する処も  
亦甚だ深遠である。

一行アキ

日本の國威國力を東亜の天地に宣現し、世  
界に輝かせた時に當り、白萩を喪つたのは、  
に痛惜に堪へざらぬ。 ~~白萩~~ 春は天の命を起し、  
奈何ともあらし難い。 ~~白萩~~ 春は天の命を起し、  
たが、 ~~白萩~~ 春は天の命を起し、

さける者は、更に斷道の達成に留め、  
雲を慰むるまであらう。











す、  
載せられたり、  
す、

白紙折去の際の

白紙が、  
中障子が、

時代のものを、  
代が、  
は、

し、  
は、  
は、

ま、

但、別に明説、  
は、

次第は、  
は、

た、  
は、

字で、  
は、

少、  
は、

不、  
は、

た、  
は、

是、  
は、

日、  
は、

已、  
は、

東、  
は、

下、  
は、

読んで  
た  
字  
の  
中  
から

お  
は  
は  
は